

### 第3章 国民 nation とナショナリズム

#### §1. ネイションの起源

- ・ 「旧き市民社会」では、高位の身分はコスモポリタンな世界に帰属し、人々はそれぞれが所属する団体に帰属していた。だが、国家の誕生とともに、また特に市民革命以後、人々は等しく、無差別に、ある国家の構成員となる。ここに市民権を基礎とする国民 nation としての意識が生まれる。
- ・ Nation という言葉の変遷
  - ⇒①ローマ時代における natio：ローマ市民以外の人々（「外部の人々」）
  - ②中世の大学における地方学生団：パリ大学にはフランス（イタリア・スペインを含むロマンス語を母語とする集団）、ピカルル（フランス東部）、ノルマン、ドイツ（イングランドとドイツ）
  - ③カトリック公会議：地方を基盤とする枢機卿・司教の集団
  - ④フランス革命：市民権を有する人々＝国民（ただし人民 *people, people* ではない）
  - ⑤19世紀：民族と国民の併用

#### §2. ナショナリズム

- ・ 国民が国家を構成するという原理とともに、その国民が国家を構成する正統性の強調や国民的な世論が形成され、また国民的教育が生まれ、自国民の栄光を謳いあげるとともに自国民による政治的自己決定 *self-determination* を主張するナショナリズムが生まれた。
- ・ 国家による直接支配の普遍化などは、やがて被支配民族の独立ナショナリズム（イタリア）、あるいは分裂した民族の統一ナショナリズム（ドイツ）を生み出し、それはまた「民族 nation」としての人民が「国家 state」を構成する正統性を訴えるナショナリズムを生み出した（フィヒテ「ドイツ国民に訴える」岩波文庫）。それはまた、個人よりも共同体としての民族の存在を強調するエスニシティー *ethnicity* に基づくナショナリズムの興隆をもたらした。個人の優位を主張した啓蒙思想に対して共同体の意義を訴えたのはヘルダー（「人間形成のための歴史哲学異説、世界の名著38」中央公論社）である。

#### §3. アイデンティティーの謎

- ・ 民族 nation を客観的に実体として規定することは不可能である。それは国民意識 *national consciousness* に基づくのであり（エルネスト・ルナン「国民とは何か」インスクリプト）、国民的アイデンティティーに規定される（アントニー・D・スミス「ネイションとエスニシティー」名古屋大学出版会）。さらに重要なことに、意識

やアイデンティティーは不変なものではない。そこから、エスニシティーに基づくナショナリズムは神話や歴史、ネイションの象徴 **symbol** などを操作する傾向をもつ。

- ・ アイデンティティーなしに人間は生きられない。そして、人間は複数のアイデンティティーの束をもっている。ナショナル・アイデンティティーのみが存在するわけでも、それが至高のアイデンティティーとなる必然性もない。
- ・ アイデンティティーは帰属する集団にとって①共通の象徴や諸関係と②外部との区別を契機として形成される。
- ・ ナショナル・アイデンティティーは近代の産物である。
  - ⇒①state としての国家の機能： 1) 「無差別な国民」の誕生（領域的直接支配は旧帝国の間接支配の多民族支配の安定性を破壊する）、2) 国民的組織の中での「ハイ・カルチャー」の形成と国民の精神的統合、3) 主権国家としての対外関係の形成
  - ②産業社会の機能： 1) 国内市場の統一と均質な消費社会形成、2) 近代的教育システムの推進、3) 地方性の破壊による統合とそれに反発する「ロマン主義的傾向」の産出、4) ブルジョアと労働者階級の対抗の中でのナショナリズムの「効用」
- ・ ナショナルな象徴や神話、伝統は「創造」され（E・ホブズボウム他「創られた伝統」紀伊国屋書店）、また「想像」されるものであり（B・アンダーソン「想像の共同体」リブレポート）、エスニックな共同体は種々の素材を基に「再発見、再解釈、再生」される（Anthony D. Smith, *Myths and Memories of the Nation*, Oxford University Press）。
- ・ アイデンティティーを支えるシンボル複合体は変化・変容を遂げながらも持続性を有する。そこからあたかもあるシンボル複合体や文化が自然であるかのように作用する。
  - ⇒①文化の伝達可能性と存在拘束性
    - ②フェルナン・ブローデル「地中海」（藤原書店）の言う「動かない歴史」
    - ③アイデンティティーの起源探究的性格
- ・ ナショナリズムは、したがって極めて近代的である側面と極めて本源的 **primordial** な、つまり過去から不変であると意識されるアイデンティティーに基づく側面をあわせもっている。このため、ネイションは近代的なものであるとする見地と歴史的に不変の、自然の、本源的な存在であるとする見地がある。
- ・ ナショナル・アイデンティティーを構成する象徴を操作しての **Symbol politics** は種々のイデオロギーと結合するが、それが排他性をもつとき、さらに「安全保障ジレンマ」に陥るときには諸国民の対立は妥協の困難なものとなる（聖戦意識）。
- ・ シンボル＝象徴の探求は 20 世紀の哲学、言語学、社会学、政治学などで新たに切

り開かれた領域である（メルロ＝ポンティ「言語の現象学」みすず書房，カッシーラー「シンボル形式の哲学」岩波文庫，クリフォード・ギアツ「文化の解釈学」岩波書店，ソシュール「一般言語学講義」岩波書店，タルコット・パーソンズ「社会体系論」青木書店など，なお構造主義ともかかわって注視されるソシュールの前掲書は丸山圭三郎「ソシュールの思想」岩波書店，ムーナン「ソシュール」大修館書店，などを手引きにするとよい。また，象徴のもつ意味が問題とされてきた背景を探るにはデュルケイム「社会学的方法の規準」岩波書店，さらにフロイトのはじめた精神分析，それを継承した E. H. Erikson, *Identity and the Life Cycle*, W. W. Norton, フッサールの現象学「論理学研究」，「イデー」－いずれもみすず書房，などに接近することが必要である）。